

氏名	洪安瀾	
学位	博士（中国言語文化学）	
学位記番号		
学位授与年月日		
審査研究科	外国語学研究科	
論文題目	現代中国語の存在表現 －空間と時間の視点から－	
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授	高橋弥守彦
	（副査）大東文化大学教授	鄭 新培
	（副査）大東文化大学教授	大島吉郎
	（副査）東洋大学教授	統 三義

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 論文の要旨およびその特色

本論文の研究対象は現代中国語の存在表現である。存在表現としては存在文「存在を表す文」“桌子

上放着一本书。” [テーブルの上に本が (一冊) 置いてある。]、所在文「所在を表す文」 “一本书放在桌子上。” [一冊の本がテーブルの上に置いてある。]、存現文「出現・消失を表す文」 “羊群里跑出骆驼来了。” [羊の群れの中からラクダが現れた。] などがある。このうちの存在文にスポットを当て、存在文を定義し、所在文・存現文との違いを詳細に述べるとともに、類似する存在・所在・所有の区分も明らかにしている。

先行研究では、言語事実により文レベルで存在文・所在文・存現文の区別をして優れた成果を上げている。洪安瀾氏は、これらの研究成果を十分にとりいれるとともに、文は原則として単語や連語から成り立っているとし、連語論の観点を取り入れ、これらの区分はすでに動詞を核とする連語に現れていると指摘している。たとえば、洪安瀾氏は上掲の存在文を「連語“(桌子上)放书”」、所在文を「連語“(书)放桌子上”」、存現文を「連語“(羊群里)跑出骆驼”」と、それぞれ分析し、現実の世界の出来事を表現する連語に注目し、出来事を現す連語が存在文・所在文・存現文の核となっていると指摘している。

日本語の動詞を核とする連語は、名詞の領域別に格付きの名詞と動詞とのくみあわせにより、連語論的な観点からの意味分析により、各むすびつきの違いと関係を明らかにしている。中国語の動詞を核とする連語は、動詞と名詞とのくみあわせによる連語を連語論的な観点「連語論的な意味」と「構造的なタイプ」とにより、むすびつきの違いを明らかにしている。中国語の連語論も日本語研究者の奥田靖雄や鈴木康之などの観点に基づき、これまでは主として2つ以上の具体的な意味のある単語を含む単語と単語との「くみあわせ」による連語論的な意味から分析する「むすびつき」の違いにより、単語に意味変化が起きることを理論的に証明しているが、各種類の文のなかで出来事を現す連語が文の核となっていることを連語論の観点から理論的に指摘したのは洪安瀾氏が初めてであろう。

これまでの先行研究では言語事実に基づき文全体を分析することにより、存在文・所在文・存現文などを区分してきたが、連語論から見る洪安瀾氏の観点により、出来事の核となる連語が各種類の文の核であり、連語が文を作る単位であることを理論的に明らかにしている。

## 2. 論文の審査内容および評価

本論文は、以下に示すごとく、序章・終章のほかに本論4章から成り立っている。

### 序章

#### 第一章 “在字句” と存在文

#### 第二章 現代中国語の存在文

#### 第三章 存在文における「時間」

#### 第四章 存在表現における「報告」、「発見」

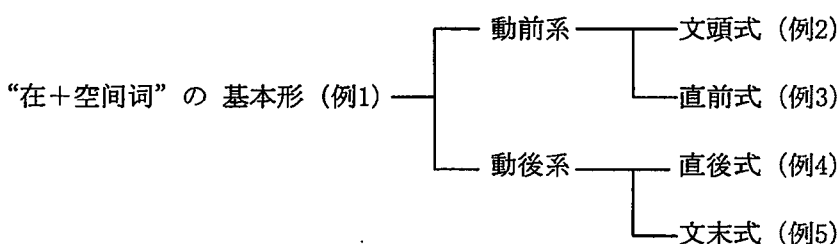
### 終章

序章では、先行研究の「存在文」の研究成果として、通時的に呂叔湘（1980）、李臨定（1993）、宋玉柱（2007）、範曉（2010）などの観点を紹介し、それに関連する“在字句”の研究成果として、王還（1957）、範繼淹（1982）、沈家煊（1999）、邢福義（2009）などの観点を紹介し、存在文に関係する高橋弥守彦（2009）、鈴木康之（2011）などの連語論の研究成果も紹介している。その後、これまでの存在文の問題点を整理し存在文“存在句”・所在文“在字句”を新たに定義付け、先行研究の成果に基づき、連語論の視点を導入し、新たな観点を加え、体系を視野に入れた分類と整理をしている。

第一章では、“在字句”と存在文との関係について述べている。洪安瀾氏は沈家煊（1999）の観点到に倣い、“在+处所”を用いる文を“在字句”といている。“在字句”の分類法は李臨定（1993:203～208）に倣うが、例（1）を設定し、それを基本用法とし、「“在”+場所」に焦点をあて“在字句”を以下の5種類に分け、且つ“在字句”を体系的に分類し全体像を明らかにしている。

- (1) 书在桌子上。（作例）／本は机のうえにある。（筆者訳）
- (2) 在桌子上他放了几本书。テーブルのうえに、彼は本を数冊置きました。（李臨定 1993:204）
- (3) 他在桌子上放了几本书。彼は机のうえに本を数冊置きました。（李臨定 1993:203）
- (4) 他把几本书放在桌子上。彼は本を数冊、机の上に置きました。（李臨定 1993:206）
- (5) 他放了几本书在桌子上。彼は本を数冊机の上に置きました。（李臨定 1993:207）

[表1-1] “在字句”の全体像



洪安瀾氏は“在+处所”の分類では、その前後に用いる動詞“放”を中心にし、動詞の前を動前系（例2, 3）、後を動後系（例4, 5）といい、その下位分類も行っている。李臨定は例（2）から（5）の文を挙げ、“在+处所”の“在”はいずれも介詞と言っているが、洪安瀾氏は動前系の“在”は介詞だが、動後系は動詞だと言い、その理由とそれぞれの文の特徴も説明している。また、例（2）（3）の“在字句”から、主語の“他”を取れば存在文になるとし、両者の関係と異同も明らかにしている。

“在+处所”の“在”は主体が行為を行う場所の標識であるとみなし、日本語訳では「主体の行為」に焦点を当て、中日両言語の対応関係を例文と説明により明らかにしている。それによれば、主体が行為を行う場所であれば「デ」格、行為の結果であれば「ニ」格、行為が移動を表していれば「ヲ」格、行為の結果によって主体が場所から消えていれば「カラ」格で現すとしている。

- (6) 他们在公园里踢足球。彼らは公園でサッカーをする。

(7) 他们在公园里藏了一把宝剑。彼らは公園に劍を一振り隠した。

(8) 他们在公园里散步。彼らは公園を散歩する。

(9) 那个单杠在公园里消失了。その鉄棒は公園からなくなった。

上掲の“在字句”の全体像(例1~5)と日本語の格付き空間詞との関係も[表1-5] (p.57) 明確に整理し、それぞれの文の特徴(p.58)も明らかにしている。その中でも、文頭式の“在”が出来事の存在を表す場合であれば、省略が可能“(在) 桌上放着书。”だとしている点は高く評価できる。

第二章では、先行研究を分析し例文を挙げて、所属文・所在文・存現文(隠現文:出現文/消失文・存在文:静態存在文/動態存在文/単純存在文)の全体像を[表2-1] (p.76)により体系的に明らかにしている。第一節で中国語の存在文について、認知言語学の図と地との観点から主語と客語との関係を通時的に検討している。次に第二節から第四節までは、李臨定(1993)の観点に基づき、現代存在文を静態存在文“大门上挂着一块木牌。”[正門に一枚木の札がかかっています。]・動態存在文“草原上奔驰着一群骏马。”[草原に駿馬の群れが疾駆しています。]・単純存在文“屋子里有人。”[部屋に人がいます。]に分類している。それぞれの存在文の先行研究とそれに関連する連語論の観点を採用して、静態存在文は場所に関する鈴木康之(2011)のモノへのはたらきかけと場所へのかかわりと高橋弥守彦(2009)の存在のむすびつきを参照しながら、例文を分析することにより詳細に論じている。動態存在文は存在物とその運動の特徴とによって、新たに「空間的な移動」“空中飘着雪花。”[空に雪がひらひらと舞っています。]、「無情物の繰返し」“夕阳中摇曳着羽毛草。”[夕焼けの中にはハブソウがゆらゆらと揺れている。]、「無情物の膨張・放射」“草原上弥漫着晨雾。”[草原には朝霧が立ち込めている。]の三類に分けている。単純存在文は「“有、是、存在”存在文”“这里边还存在一些问题。”[この中にはなおいくつかの問題がある。]、「“无动”存在文”“山下一片好风光。”[山の下は素晴らしい景色です。]の二類に分けている。

上記三種類の存在文も主述文の一類ではあるが、一般的な“在字句”で作る主述文“三匹马奔驰在草原上。”[三頭の馬が草原を走っている。]が施事を主体としているのに対し、存在文は場所に焦点を当て、場所を旧情報として文頭に用い、文をくみだしている。洪安瀾氏は焦点のあてられた場所で客体が静止しているか動いているかによって静態存在文“草原上卧着三匹马。”[草原に馬が三頭うずくまっている。]と動態存在文“草原上奔驰着三匹马。”[草原で三頭の馬が走っている。]に分け、客体が動きと無関係であれば、単純存在文“草原上有一座蒙古包。”[草原にゲルが一つある。]としている。この三類の存在文は出来事が必ず場所の中に存在するという観点を立てている。

第三章では、存在文は一般に動態助詞を用いない場合のほうが多いと述べているが、存在文における「時間」の長短を存在文に用いられている動態助詞“了、着、过”との関係で論述している。まず、場所詞を文頭に用いる主述文“墙上他挂了一幅画。”[壁に彼は絵をかけた。]と存在文“墙上挂着一幅画。”[壁に絵がかかっている]との関係を述べ、行為の行われる順序について述べている。次に存在

文のなかに動態助詞を用いる場合は“着”を用いる場合が多いが、“了、过”も場面によって用いられるとしている。存在文に用いられる“了、着、过”から存在文の存在する時間の長短が分かるとし、存在文における動態助詞“了、着、过”を分析することにより、存在文の存在する時間の長短とこれらの動態助詞を用いる言語環境について詳細に論述している。

一般に“了”は動作が少し前に完了し、“着”は現在の動作の持続状態を表し、“过”はある動作が現在から切り離された過去の経験であることを表す。連語論お観点から、“着”を用いると眼前の現実のこととなるが、存在文の存在する時間の長短では、以下の例文に表れているように、行為の行われる順序は動態助詞の表す通りとは限らない、としている。

(10) 坟上种了一排小杉树。(出来事の完了)

墓には、若い杉の木が植えられた。(著者訳)

(11) 坟上种着一排小杉树。(出来事の結果の持続)

墓には、若い杉の木が植えられている。(著者訳)

(12) 坟上种过一排小杉树。(過去の経験としての出来事)

墓には、若い杉の木が植えられていたことがある。(著者訳)

洪安瀾氏は上記3例の比較により、“了”を用いる例(10)は比較的近くの出来事だとし、“着”を用いる例(11)は現在のことを描写しているが、この事実はかなり前から存在しているとし、“过”を用いる例(12)は、現在と切り離された経験を表すので、かなり以前のこととみなしている。上記3例の行為の行われた時間から見れば、一般的には古い順に例(12)(11)(10)である、としている。

第四章では、話し言葉における存在文について、事例により詳細に述べている。それによれば、話し言葉における存在文は「報告」、「発見」を表す場合に用いられ、大きな成果を上げている。存在文からの報告と発見に関する論考は高く評価できる。

終章では第一章から第四章までの存在文とそれにかかわる問題を整理し論述している。

本論文は先行研究を綿密に分析し、存在文とそれに関連する各種類の文との関係を明らかにしている点、および一つの焦点により各用法を体系化していることは高く評価でき、これまでに見られない成果である。洪安瀾氏は先行研究を十分に読みこなし、収集した例文と説明とにより、存在文を中心とする文と関連する文との関係を体系的に整理し、これまでの問題点を解決し、新たな観点をいくつか明確に出している点は高く評価できる。残す課題はいくつかあるものの、今後の研究に解決が期待されるものであり、本論文は博士の学位にふさわしい成果と認定される。

### 3. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会では、全員一致をもって、本論文は博士(中国言語文化学)の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上